

特集：最近開発された産業動物用抗菌性物質の基礎と応用\*

## A Symposium: The Nature and Clinical Application of New Antimicrobials for Farm Animal Use

### 今回のシンポジウムにあたって

高橋 勇（日本獣医畜産大学名誉教授）

当研究会は、1953年の発足以来、毎年春にシンポジウムを開催し、今回(1995年)で第22回目を迎えた。

この間、時に応じて新規に開発された動物用抗菌性物質のいくつかを取まとめたシンポジウムをすでに4回開催し、その基礎面と応用面の成績の詳細を各製薬会社の担当者に講演いただき、その内容は会報に掲載してきた。このことは基礎面の研究者等にとっては、各薬剤の特性を知る上での参考となり、また一方、臨床の専門家にとっては、各薬剤を適正使用する上に役立つなど、獣医学の発展に資する点で誠に大きなものがあったと言えよう。そして、これは当研究会が果たしている社会的使命の重要な役割の一つであろうと思われる。

今回は、その第5回目として、新規に開発された、動物用抗菌性物質の4種をまとめて取り上げることとした。第20回のシンポジウムで4種のニューキノロンを取り上げてからまだ2年しか経過していないが、これだけの新薬が開発されたのは、各社の努力もさることながら、野外からの要望が強いことを裏書きしており、獣医学の発展上からも喜ばしいことである。

今回取り上げた薬剤は、いずれも産業動物の消化器および呼吸器の感染症を対象として開発されたもので、フロルフェニコールは合成抗菌剤(チアンフェニコールの誘導体)、チルミコシンはマクロライド系抗生物質、アスポキシシリンはペニシリン系抗生物質、オルビフロキサシンはニューキノロン系合成抗菌剤(第20回のシンポジウム後承認)である。これら薬剤に関し、それぞれの開発会社の担当者から、開発の経緯、体内動態、試験管内抗菌力、臨床応用試験成績、残留試験成績などについて、紹介いただくこととした。

各演者の方々には、ご多忙中にもかかわらずご講演していただき、厚くお礼を申し上げます。

---

\* 本特集は1995年4月3日に開催された第22回本会シンポジウムの講演要旨である。